友田美智子先生を偲んで

有坂文雄

出会い

私が初めて美智子先生にお会いしたのは、２００４年７月１８日（日）の事でした。ですから、先生とレッスンを通して接することができたのは６年半ということになります。しかし、それよりもっとずっと長くお世話になったような気がします。その日というのは、めぐろパーシモンホールだったと思いますが、「フルート合奏の集い」があった日でした。その２～３週間前に、小学校の同級生の岡大寿君から電話があり、「アリちゃん、まだフルートやってる？」と聞かれ、「まあ、細々とね。」と答えたのを覚えています。彼からこの「合奏の集い」を紹介されたのです。

いくつか偶然が重なりました。その１ヶ月ほど前に、当時ピアノを習っていた、大学に入ったばかりの三男と高校生の末の息子のピアノのおさらい会のときに、ピアノの先生から、家族の方で何か楽器をなさる方があったらどうぞ一緒に合奏して下さい、というお話がありました。私は合奏が大好きなので、すぐその話に乗って、高校生の息子に伴奏してもらって合奏をすることになりました。そしてそれを機会に、それまで吹いていた頭部管だけが銀だったフルートを総銀製の新しいフルートに買い換えたところでした。

パーシモンホールでの「合奏の集い」は、曲目は忘れましたが、いくつかのグループに分かれて、20～30 分練習した後、みんなの前で演奏するというもので、久しぶりに楽しい合奏のひとときでした。それ以来、レッスンに伺うようになりました。しばらくの間はどこかでフルートを吹くことになった時にその演奏をちょっと見ていただく程度だったのですが、次第に、もっと上達したくなり、そのためにはきちんと練習曲やソノリテなどもやって行かなくては、ということで、おさらい会や発表会の曲と並行してアルテの教則本の 2 巻目もやっていくことになりました。

レッスン

実は私はバッハが大好きで、バッハのフルートソナタが吹けるようになれば本望と思っていたので、いつだったか、「バッハだけ練習していってはだめでしょうか。」と伺ってみたことがありました。その時言われたのは「バッハはバッハだけ練習していたのでは吹けるようになりません。」ということと、「フランスものにもいい曲がたくさんあります。フランスものをやってみると、きっと音楽の世界が広がります。」ということでした。なんでも、ドイツのバロックあたりは、易しそうに見えるかもしれないが、楽譜をそのまま吹いたのでは面白くなく、いろいろ装飾など工夫しなくてはいけない、それに対してフランスものは一見難しそうだけれども、楽譜通り吹くと一応聴ける音楽になる、ということでした。それから、唇の歌口へのあて方を毎回相当長い間直されました。最後まで、唇で作る穴がまだ十分小さくないために無駄な息がある、と

言われましたが、最近の二年間くらいは余りその注意はなくなりました。諦められたのかもしれません。

昔は、難しい曲でもがむしゃらに練習すれば、いつか吹けるようになるだろう、と思っていたのですが、友田先生に習い始めてから、自己流にがむしゃらに練習していても難しい曲は吹けるようにはならない、ということが分かりました。それが分かったのは大きな収穫でした。結局、レッスンには２ヶ月に１度くらいしか通えなかったので、どうしても次の発表会やおさらい会の曲目を練習するのに多くの時間が費やされました。やることになっていたモイーズの「ソノリテについて」や「２４の旋律的小練習曲」も最初の処だけで終わってしまいました。ひとつだけ比較的頑張って練習したのが Taffanel & Gaubert の「１７のメカニスム大練習」でした。ピアノのハノンみたいなものですね。こういう練習というのは、美しい曲を吹くために仕方なくやるものだと思っていました。実際そういう面がなきにしもあらずですが、何故か、練習しているうちにはまってしまい、指定されたところを２～３ヶ月、そればかり練習しました。それが唯一の原因ではないと思いますが、腱鞘炎を起こして往生しました。ちなみに、その時紹介していただいた鍼灸整骨院のＳ先生には今でも何かあるとお世話になっています。しかし、その練習のお陰で指が動くようになったばかりでなく、音が安定して来て低音が以前よりずっと楽に響くようになったと思いました。

発表会・おさらい会・ムラマツフェアコンサートで最近演奏した曲目は、ライネッケの「ウンディーネ」第１楽章、プロコフィエフの「フルートソナタ」第１楽章、バッハの「ソナタホ短調」、エネスコの「カンタービレとプレスト」などで、不完全ではありますが、いつか吹けるようになるかどうかも分からなかった曲に挑戦でき、曲がりなりにも演奏できたことをとても幸せに思いました。ステージで３回位吹くと自分のものになりますよ、と言われたことを思い出しますが、大学祭での演奏を含めると上記のエネスコは３回になり、これは確かに自分のレパートリーになりそうです。おさらい会で最初に演奏した時にあんなに四苦八苦して演奏したのが今ではそれほど大変でなくなったのはとても不思議な気がします。プロコフィエフの後、曲と一緒に練習曲もやりましょう、ということで、ケーラーの「１５のやさしい練習曲」を練習することになっていました。自分としては、またバッハに戻って一つずつ見ていただきたいと思っていたのですが、これもかなわぬ事となってしまいました。

もうひとつ、恵まれていたと思うのはピアニストとの出会いです。美智子先生ご自身に伴奏していただいた事もありましたが、大石和子先生、会田賢寿さん（チェンバロ）、石岡千弘さん、小滝翔平さん、それから通奏低音で唱さんにも伴奏していただきました。曲想について、伴奏していただいて初めて、ああそうか、なるほどと思ったこともたびたびありました。特に小滝さんには何回か伴奏していただき、その度にとても勉強になりました。２００４年９月の発表会で友田啓明先生始めプロの弦の方達とモーツァルトのフルート四重奏ト長調 K285a を演奏したのもいい思い出になりました。終わりの方でしたが、練

習では失敗したことのなかったところで、短い休みの後、数え損なって出られず、ついに最後まで復帰できなかったのは残念でしたが。

印象に残った言葉

ステージで３回位吹くと云々、と言う言葉のほかに、美智子先生の言葉で思い出すのは、「美しいものは悲しい」という言葉です。確か、エネスコを練習していた時に、「そこはそんなに明るく楽しそうに吹いてはいけません。美しいものは悲しい、という哲学があって、ここはまさにそういうところです。」と言われたことがあり、なぜか心に深く残りました。

もうひとつ印象に残っているのは、おさらい会の時によく言われたことで、自分の演奏を人の演奏と比較しないようにしましょう、そうではなくて、自分の１年前、２年前の演奏と比較して下さい、と言われたことです。この歳になっても正しく練習していけば上達できる、という体験は私にとって本当に貴重なものでした。アマチュアとして究められるところまで究めてみたい、と段々強く思うようになりました。

カンボジアのこと

私の姉夫婦がカンボジアで、子供達のためのボランティア活動を続けていて、もう５年ほどになります。美智子先生は姉たちの活動に強い興味と理解を示して下さり、何回か義援金や物資を送って下さいました。カンボジアの方々や当地で活動されているシスター方が特に喜ばれたのが医療品で、カットバン、バンドエイドなどはあちらでは手に入らない貴重なものだそうです。姉とは女同士ということもあったのでしょう、何度か心情を吐露されたメールをやりとりなさったようです。後から聞いたところによれば、既に大分前から死を覚悟されていたようです。しかし、そういうことは私たちには全くおっしゃいませんでした。最後まですべてのことに対して前向きでいらっしゃいました。「みなさんが元気でいらっしゃるのが私にとって大きな力です。」とおっしゃったのが強く記憶に残っています。

エピローグ

２００９年９月にフランスのスイス国境に近いアヌシーという小さな古い町で開催された小規模の国際会議に参加しました。湖に面した美しい町で、到着した日に時間があったので街中を散歩してみました。そのときある店で手に入れた、縦長の小さな絵が私の自宅の部屋に飾ってあります。ピアノと猫と楽譜が描かれていて、この絵を見るたびに美智子先生の面影が浮かんできます。ピアノの傍らの猫は前足をそろえ、「かぎしっぽ」というには少ししか曲がっていない尻尾を垂直に立ててピアノを聴いているようです。

美智子先生のブログ「かぎしっぽ」は、時折拝見しては、「お元気だな。」と安心したものでした。この度、唱さんが後を継いで「かぎしっぽ」を存続させて下さるとのことで、すでに見せていただいていますが、これからも楽

しみです。
　フルートを吹くということは以前からとても好きなことでしたが、美智子先生に出会い、レッスンを受けたことによって、自分にとってさらにより深い意味で大切なものとなりました。先生から教えていただいた事を思い出しながらこれからも練習に励んでいきたいと思います。